

秋田県青少年健全育成審議会 平成27年度第3回環境浄化部会 議事概要

日時 平成27年12月1日(火) 午前10時00分～午前11時35分

場所 秋田県議会棟2階 特別会議室

1 出席者

- 秋田県青少年健全育成審議会委員(環境浄化部会委員)(敬称略、五十音順) 9名
 - 石川 信 秋田県書店商業組合 監事
 - 石塚 弘子 秋田県警察本部生活安全部少年女性安全課 少年補導係長
 - 伊藤 一 秋田市立御所野小学校 校長
 - 小松 洋輔 秋田少年鑑別所 所長
 - 鈴木 朋子 元秋田県高等学校PTA連合会 副会長
 - 高橋 秀晴 秋田県立大学 教授
 - 野崎 一 秋田県PTA連合会 副会長
 - 眞壁 聡子 秋田県立横手城南高等学校 校長
 - 三浦 基 青少年育成秋田県民会議 会長
- 事務局
 - 男女共同参画課 佐藤 巧

2 議事(審議)

- 優良図書1冊、有害図書5冊を諮問。
- 先に優良図書について審議します。事前審査(欠席委員を含む)では、10名の委員全員が総合意見として推奨可という結果です。
補足意見として、各委員からは、
 - ・ 審査基準の全てに渡って可否を問うものではないが、情報リテラシーを身につけるための図書として特化して考えれば良いのではないか。
 - ・ 単なる情報の受け止め方や届け方に留まらず、とらえ方にとらわれず、そこに思いやりという問題があるところが良い。
 - ・ 分かりやすいということと、話し合い活動や教育の場でみんなこれをどう思うかなど、広がり、展開性を持った本ではないか。
 - ・ 被害者、加害者両方にならないようなギモンとジモンがある。大人にとっても必要な本である。という皆さん非常に高い評価です。
特に意見欄に記載しなかった方を中心に、何か補足意見ございませんか。
→(全委員)なし。
- いつもここでネットの有害図書どころではない情報をどうしたらよいかという話になるのですが、ネット社会の恐ろしさは教育現場ではどの教科でも扱えないわけですので、こういう本をどういったかたちで教育現場で利用していくとか、社会の中で共

有していくというのは大事な視点となっていくと思います。そういう意味を含めて、この本を優良図書として指定するという御意見でよろしいでしょうか。

→（全委員）異議なし。

- それでは全員一致で、「10代からの情報キャッチボール入門情報リテラシー」を優良図書として推奨するという事で知事に答申いたします。

～有害図書審議～

- 次に有害図書の審査結果について、集計担当委員から報告願います。
→（集計担当委員）総合意見は、全員1番から5番まで、指定対象にするということと同じ意見です。今回は、特に御意見を記載された方はおりません。

- 有害図書指定ということで一致していますが、何か気になることがございますか。
私は、5番の刑務所の中の話が悩ましく、最終的には犯罪とか、暴力的な要素があるという判断になったのですが、それ程そのようなことを肯定的に描いているものでもなく、檻の中はこんなに大変だよというメッセージもあり迷いました。

この本についてどなたか御意見ございますか。

→（全委員）なし

- この本について、女刑囚と警務官のレズシーンがあって、これはかなり性的描写があり、有害指定という判断でしたが、本全体としての方向性としてはこういうのも有りかなとも思いました。もちろん、有害ではないという判断ではありません。

→（委員）4番、5番の本については暴力的な表現があると思いました。

- 3番について皆さん何か御意見ございませんか。

→（委員）3番の壊れている人たちの本はあまり性的なものはなかったのですが、暴力的な表現があってだめだと思いました。

- そうですね、粗暴性、残虐性、あるいは、殺人、暴行、傷害、肉体的苦痛をという条項に当たるということですね。

→（委員）3番の本と4番の本は同じ所を出していますよね。次から次へと出てくるこのような本を、全部青少年に売られないように出来ないのでしょうか。

→（事務局）個別指定のほかには包括指定があります。そのほか、1月号が個別指定され、同じような内容の2月号、3月号が個別指定されない場合は、販売店に対し区分陳列をお願いするという対応が考えられます。

→（委員）少年鑑別所で子どもたちに見せて良い本かどうか判断するとき、雑誌の名前で包括的に指定することは出来ないですね。中身を確認しなければならないと思いますので、題名だけで指定することは難しいと思います。

- 有害図書に指定された場合、内容を改めようとするかもしれないので、何か月に1

回でも指定することによって、抑止力になるということでしょうね。

それでは、この5冊について、全て有害指定として知事に答申するということがよろしいでしょうか。

→（全委員）異議無し。

○ そのほかに、青少年の環境浄化を巡る問題点や提言をそれぞれの委員に話してもらいたいと思います。

→（委員） 有害少年人口、非行少年人口とも割合は減ってきており、少年たちはおとなしくなっていると思います。しかし、犯罪は犯していないものの、反社会的な方向に行っているのではないかと、少年たちは普段何をしているのだろうと感じています。

○ 大学生を見ていると、波風を立てないようにしている感じがします。また、ツイッター等を大事にして、表面上は人と人がつながっているように見えるが、真相はどうかと思います。

→（委員） 小学生を見ていると、分別のある発言や活動が出来るが、自分の意見をはっきりと人に言えるかというところが弱いかもしれません。ゲームなど、自分の中でしか遊べないのではないかと思います。10年くらい前の子どもよりも子どもたちは優しい感じがします。

○ 今の子どもたちは分かっているかどうか見えないところがありますね。

→（委員） 非行少年・不良行為少年とも、ここ10年くらい減少を続けています。褒められたり、家庭で声を掛けられずに大人にならないまま成長していく子どもが多いと感じます。

警察では、非行少年に声を掛け、大学生ボランティア等とともに、大学生との勉強、農作業体験などを経験してもらい、人は見てくれているんだ、心配しているんだということを伝えようとしています。

○ 警察が多重的な支援をしていることが分かりました。

→（委員） 今の子どもたちは、書店でレジに人がいないと立ち読みをして、レジに入るといなくなります。立ち読みは良くないということを意識しているのかと思います。そういう意味では分別がついているのだと思います。

また、子どもの購買意欲がなくなったと感じています。発売日に買いに来る人が少なくなりましたし、昔のように、雑誌の漫画の話題でまとまることが少なくなかったと思います。

→（委員） 今は両親、祖父母など、子ども一人に係る手が多くあるので、自分中心に育つ子が多いと感じています。面と向かえば悪口を言わず良い子なのですが、ネット社会に悪口を書く子どももいます。一斉に拡散してしまい、被害者が出るのに、そういうことをやる子どもがいるということは根が深いのではないかと思います。

います。

表面とは別に、奥に何かあるのではないかと感じます。

- 良い子が増えている反面、その副作用的なゆがみが出ているのではないかということですね。少子化で、手を掛けることによってしつけも行き届いてお利口さんにはなったけども、本心そのものは自己中心から逃れられないでいるということですね。

→ (委員) 何でも思い通りになるということが、人の気持ちになることが出来ないということになっているのではないかと思います。

- 人の気持ちになれる訓練の場を、家庭、学校、地域、社会が考えなければならないということにもなりますよね。

→ (委員) 集団で何かを訓練する必要があると思います。

→ (委員) 昔の子どもは発散の場が外に向いていた気がします。今の子どもたちは現実の社会から離れたところに興味を持ち、内々になってしまっている感じがします。ネット社会の中に現れ、悪口だとか、鬱憤を晴らす場になってしまっているように感じられます。

いじめだったり、問題行動をする多くのお子さんがいるという問題について親御さんとお話しすると、それを肯定するようなことしか言わない方が結構多くいます。我々世代よりずっと下の世代で、先ほど申し上げたような環境で育ってきた人が親になってきているので、聞きに来なかったり、伝わらないということが問題だと感じています。

- 子どもたちに話をしても、その親の意識が全然違うと意味をなさないので、ピンポイントで解決する方法がないということですね。

→ (委員) その親の背中を見て育ってきている子どもはそれが当たり前だと思ってしまっています。そういう子どもが増えてきて、そういうところについて行けない子どもは学校に来なくなります。

子どもを怒ってくれる人がいなくなっています。生徒たちも普通が良いと言うようになっています。

→ (委員) 高校生を見ていると、子どもたちが優しくなったと感じます。20年くらい前は、生徒が問題を起こす心配、生徒の反発は毎日のようにありました。前の世代の人たちは、親や教師という身近な存在に反発して、それを乗り越えて成長してきたと思います。ところが、今の子どもたちは親や教師とみんな仲良しで、親だけでなく周りの仲間とも仲良くやっけて行こうとするので、一見穏やかな風潮があります。しかし、ちょっとしたことで傷つくということも頻繁にあります。いじめのアンケートなどをすると、ちょっとしたことで傷ついているんだという記述がたくさん出て来ます。

そのようなことは別の問題点としてもあり、高校に入ったのに不登校になってしまう子がいます。昔は学校を辞めるか続けるかの選択肢しかなかったのですが、今の子どもたちは様々な学びの場があるので、別の方向に行くという選択が出来ます。その反面、何か、自分の問題を乗り越えるという経験をしない風になって

しまっているのだと思います。

- 昔、理想としていたことが実現した結果、それにも思わぬ落とし穴があったということを感じて、なかなか難しいと思いました。

→（委員）少年非行がピークを迎えた今から50年くらい前、青少年育成国民会議が出来、県や市町村にも出来ました。

少年非行を押さえ、その頃中心になって活動した人たちが今でも頑張ってくれています。現在、秋田県民会議をはじめ、県内の市町村民会議はどこも高齢化し、後を継いでくれる人がいなければ地域コミュニティは崩壊してしまうと危機意識を募らせています。

高校から始まって、中学校小学校、幼稚園、保育園、認定こども園まで、みんな保護者がその年代になると一緒に活動をします。秋田県では、そこに委員として大学が飛び込んできて、大学生が年下の子ども達と一緒に活動しています。

このように、地域コミュニティはまだまだ生きている状態ですので、子どもと教師の関係についても、一人の人間と一人の人間としての繋がりを大切にしていくこと、それが表面的な解決でなくお互いを認め合うということに繋がっていくのではないかと思います。そういう気持ちで活動を続けています。

- なかなか深い示唆を頂けたと思いますので、引き続きこういう問題も掘り起こして行きながら議論していきたいと思います。